

〔東雅草^{十五}〕卷柏イハグミ略○中

倭名鈔草類に見えし物名、上世より云ひつぎしと見えしは解す

べからざる多かり、草を呼びてクサといふ義の如きも猶不詳種字讀てクサといふが如きは舊く訓ゼ

し所なり、是等の語も草をクサといふ事あるべしと思はれず、
是等の詞によりて、草をクサといふ事あるべしと思はれず、

古の時には、百濟より諸道の博士并に採薬師等をも番上せしめしとも見えれば、我國の上世よりいひつぎし所のみにもあらず、韓地の方言をもて呼びし物も相混せざる事を得べからず、石薺を呼でスクナヒコノクス子といふは、小彦名神之薬根といふが如く、玄參をオシクサといふも、古語拾遺に見えし天押草といふもの、如し、また烏扇をカラスアフギといひ、薙苳をツジダマといふが如き、是等の名も神代より聞えし事の如くに、古語拾遺には見えけり、されど烏扇をカラスアフギと云ひしは、烏扇の字により、薙苳をツジダマといひしは、其子の珠數の如くなるを云ひしによりしと見えれば、太古の時にあたりて、かゝる名あるべしと思はれず、古の名既に亡びたりければ、今呼ぶ所の名によりてしるせし所なるべし、芍薬をエビスグスリといひ、決明をエビスグサといひ、地榆をエビス子といひ、又アヤメタムといふが如き、旋花をハヤヒトグサといひ、大戟をもハヤヒトグサといふが如きは、其始て出でし地方をもて呼ぶに似たり、或は漢名によりて呼ぶ事、忘憂をワスレグサといひ、貝母をハ、クリといひ、白頭翁をオキナグサといふが如き、或は漢音によりて呼ぶ事、芭蕉をバセヲバといひ、蒟蒻をソクトクといふが如き、皆是漢字傳へし後に名づけいひし所といひたり、又其名同じくして其物は異なるも少からず、旋花大戟共にハヤヒトグサといひ、卷柏石草共にイハグミといふの類是なり、彼物によりて此名あるも少なからず、路をフ、キといふに因りて、欸冬をヤマフ、キといひ、茨をミヅフ、キといひ、惡實をウマフ、キといひ、芹をセリといふに因りて、苳胡をノゼリといひ、當歸をヤマゼリとも、オホゼリともウマゼリとも、葶藶をハマゼリともいふの類此なり、大なるをばムマとい